

「散文トリスタン」における「貞潔の試練」

太 古 隆 治

膨大な長さを誇る「散文トリスタン」には、その長さに匹敵する数多くの借用が見出される。その借用に用いられた作品は、ベルール、トマのトリスタン物語は挙げるまでもなく、「散文ランスロ」のこれまた膨大なものから、今日一つの断片写本でしか知られていない小さな作品まで多種多様である。「散文トリスタン」中のそうした借用例のうち特に我々の目を引くものに、女性の不貞を暴く魔法の杯が出てくるエピソードがある¹⁾。この話は、今日「貞潔の試練」(l'épreuve de chasteté)と呼ばれているジャンルに属し、十二世紀末に Robert Biket が書き残した「杯のレー」*Lai du Cor*、またその後まもなく書かれたものと思われる「短いマントのレー」*Lai du cort mantel*に遡らせることができる²⁾。この二つのレーは、アーサー王の宮廷に送りこまれた杯あるいはマントが、そこに込められた妖精の術によって貴婦人たちの不貞を暴き、騎士道の精華を象徴すべきアーサー王の宮廷に滑稽劇を繰り広げる様を語り、「レー」とは言ってもファブリオー的性格を備えている。魔法の杯の話は、「散文トリスタン」だけではなく、「ベルスヴァル第一続篇」中の「カラドックの書」においても使用されている³⁾。また、マントを用いた話は、Ulrich von Zatzikhovenの *Lanzelet* の中にドイツ語版を見出す⁴⁾。

「散文トリスタン」は、舞台をマルク王の宮廷に移し、不義の愛に生きるトリスタンとイゾーを巡って緊張が否応なく深まってゆく過程に、問題のエピソードを挿入している。そのエピソード自体は、「散文トリスタン」の膨大な長さの中では、極めて短いものに過ぎない。それにもかかわらずこのエピソードが我々の目を引くのは、魔法の道具で女性の貞潔を試験するといった現実離れた話自体の面白さと同時に、そのような荒唐無稽な話を、まさにトリスタンとイゾーの物語の中に見出すことの意外性の故である。「散文トリスタン」の際立った性格として、作者の現実的な創作態度が挙げられるが、この面白さと意外性がそのような現実的な創作態度とどのように折り合っているのか一つの疑問となるところである。そこで、「散文トリスタン」の作者が、どのように、またいかなる意図のもとに「貞潔の試練」のモチーフを用いているのか、この小論で探ってみたい。

「貞潔の試練」の物語と『散文トリスタン』における翻案の概観

まず最初に、「貞潔の試練」の物語が伝統的にいかなる内容と形式を持っているか、また「散文トリスタン」がそれをどのように利用しているかを概観するため、「杯のレー」、ついで「マントのレー」、最後に「散文トリスタン」における問題のエピソードを要約しておこう。

1) 「杯のレー」

聖霊降臨祭(Pentecôte)を祝うアーサー王の宮廷に一人の若者が到着する。若者は、主人(roi de Moraine)からの贈り物と称して、象牙の杯をアーサーに献呈する。見ると杯には刻文が彫りこまれており、それには、不貞の妻を持つ男がこの杯を試そうとするならば、杯は中身を迸らせ、その人の体に浴びせかけずにはおかない、と書かれてある。居並ぶ騎士や宮廷婦人の不安と動揺を尻目に、アーサー自ら杯に挑むが、たちまち足の先まですぶ濡れとなり、無様な姿を晒してしまう。后グニエヴルに対する王の激怒は言うまでもなく、「この世に生まれ人に嫁いだ女で愚かなこと(folie)を一度も考えたことのない者はいない」と言って后を弁護するイーヴァンにも、雄弁に潔白を訴えるグニエヴルにも、傾けるべき耳を持たない。アーサーは、他の者たちに杯を回して自分が受けた恥の仇を討とうとする。かくして、roi de Sinadoune, roi Nuz, Aguisiaus d'Escoce, etc... が次々と挑戦するが、試練をくぐり抜ける者は誰一人としていない。ここにきてアーサーの怒りは満足と喜びに転じ、王と后は仲を取り戻す。宮廷の喜びは、最後に試練に成功する一人の騎士の登場によって頂点に達する。この騎士 Garaduc は、妻の励ましの言葉に勇気づけられ、見事に杯を飲み干し妻の貞潔を証明するのである。

このように、「杯のレー」の物語は、アンチ・アーサー王的性格をもって展開するように見えながら、結局は罪のない笑い話に終わる。

2) 「マントのレー」

「マントのレー」も「杯のレー」と同じく聖霊降臨祭を祝うアーサーの宮廷に使者が訪れることから物語は始まる。この物語は、アーサー王文学のトポスを構成する特徴的素材を忠実に踏襲する。王は、何か新しい冒険が起きないうちは飲む物も食べる物も口にしないと張り、頑として食卓につこうとしない。それが大祝祭の日の王の「習慣」⁵⁾なのだ。時を見計らったように一人の若者が宮廷を訪れ、とある乙女からの使者と称してアーサー王に対し、所謂「拘束的贈与 <don contraignant>」⁶⁾の訴えに出る。使者は、王の承諾を得ると、一着の美しいマントを取り出す。彼の口上によると、妖精の手になるこのマントは、夫または恋人に真に忠実な女性の体にしかな合わないとのことである。かくのごとくマントの力の説明をしておいて若者は、宮廷の全ての女性がマントの試練を受けるよう王に要求する。王は后と婦人たちを呼びにやり、最も似合う者にマントを取らせることを約束して試着を行わせる。后が真先に

試みるが、マントは丈が足らず、かろうじて裾が床をかすめる。次に挑戦した Tor の恋人の場合、后と全く同じ体格をしているのにもかかわらず、マントは一層短くなってしまふ。これを見た毒舌で知られるキューは、「お后様、これは、貴方がより貞淑であるというわけではなく、単にあなたの不貞がより少ないということを言わんとしているのです」と言って后を揶揄する。こうしてマントは次々と女性たち — ここでは、「杯のレー」の「妻」ではなく、読者に馴染みである円卓の騎士たちの「恋人」が問題となる — の挑戦を受けるが、その都度まるで生き物のように反応を変え、ある女性が右膝を、またある女性が左膝を覗かせれば、また別の女性は臀部を露にしよう。マントのそうした反応は一つひとつ、キューや他の騎士によって慇懃の裏に含みを隠した言葉でもって解説され、時にはかなり卑猥な解釈まで持ち出される。結局、物語は、「杯のレー」と同様、Karados Briebraz の恋人が試練に成功して二人の偽りなき愛を証明し、同時に宮廷の名誉も回復されたように見えるが、しかし二人の恋人は試練に失敗した人々の嫉みを買って物語は終わる。

「マントのレー」は、「杯のレー」に較べると、作品としてはるかに練り上げられた物語である。その特質は、宮廷男女が繰り広げる滑稽劇を単なる笑話に終わらせず、表面を装った宮廷愛と騎士道の裏側をえぐる辛辣なイロニーにあると言えよう。

3) 「散文トリスタン」

「散文トリスタン」は、「貞潔の試練」の物語をラモラという新しい登場人物の紹介に絡めて導入する。試練の舞台がマルク王の宮廷に変えられているが、この舞台の転換だけにとどまらず、トリスタン物語の伝統的登場人物にこのラモラを加えた絡み合いを通して、「貞潔の試練」の元々の内容は大幅な変更を被っている。

聖ジャン祭後の火曜日、マルク王がトリスタンやイザーとともにタンタジェル城外の野に出て気晴らしに興じているところに、二人の若き遍歴の騎士（ともにアーサー王に仕える騎士）が現れる。二人は兄弟でラモラ (Lamorat) とドリアン (Driant) といい、イザーの美貌をその目で確かめるためにコルヌアイユの国を訪れたのであった。将棋に興じるトリスタンとイザーのすぐ前で二人の議論が始まる。冷静にイザーの美を賞賛するドリアンに対して、オルカニーの王妃に恋を捧げるラモラは、自分の「奥方(dame)」の美しさの方がイザーより勝る、と頑強に主張して止まない。

この後、二人はコルヌアイユの騎士たちの腕前に挑戦し、マルク王が差し向ける騎士を次々に打ち負かしていくが、トリスタンにだけは例外で、二人とも彼の槍のひと突きで手痛い屈辱を喫する。ラモラは、剣による勝負のやり直しを望むが、トリスタンはラモラに対する好意ゆえにそれを拒否する。この拒否に対してラモラはトリスタンを臆病者で卑怯者と決めつけ、恨みを残して立ち去る⁷⁾。

コルヌアイユを後にしたラモラとドリアンは、アーサー王のもとに魔法の杯を運ぶ途上の騎士と乙女に出会う。騎士は、この杯が不実な女性を見破る力を持っており、

アーサー王の宮廷に送り届けるころだと教える。ラモラは、使者を剣で負かし、その送り主がアーサーの妹、妖精のモルガンであることを白状させる。アーサーに仕えるラモラがモルガンの企みを見逃す筈がない。彼は、使者をさらに剣で脅し、杯をマルク王の宮廷に差し向けるよう無理矢理約束させる。

杯が届けられてきたのは、丁度マドレーヌの祭日にあたり、マルク王は内外の騎士の列席のもとに盛大に宮宴を催しているところだった。トリスタンは、不安を隠せず、最悪の事態に備えて戦いの心構えをする。マルクは、女たちを呼び集め、イズーに杯を試すよう求めるが、彼女は魔法というものの邪悪な意図を訴えて拒否しようとする。しかし、結局マルクの執拗な要求を退けることはできず、イズーは魔法の杯に挑み、中のワインを体に浴びて惨めな姿を晒してしまう。次いでマルクは他の女たち全てに杯を回すが、百人以上いた宮廷女性の内「4人」を除いてことごとく試練に失敗する。マルクはこの「4人」を除いた全ての者を断罪するよう陪臣たちに要求するが、愛する妻の死を認めることのできない陪臣は王の裁きを拒絶し、かくして事件は不問に付されることになる。

基本的相違

以上三つのテキストの内容を概観してきた。本論末尾の対照表は、各テキストの基本的特徴を拾ったものである。参考として「カラドックの書」に使用されている杯の話の特徴もついでに挙げておいたが、それはこの話が「杯のレー」の伝統に極めて忠実であることを確認しておくためである。

「貞潔の試練」の物語の古型では、魔法の杯あるいはマントを誰が何のためにアーサー王のもとに送るのかは明白ではない。とりわけ「マントのレー」と「カラドックの書」においては、このマントあるいは杯は、祭りを祝う日に「新しい冒険が宮廷を訪れないうちは飲み物も食べ物も口にはしない」と強情をはるアーサー王のもとに、まさしく「冒険(aventure)」の語にふさわしく全く無動機のものとして現れる。これに対して「散文トリスタン」においては、もともとアーサー王の宮廷に杯を送りつけようとしていたモルガンは、アーサーに対する怨念という動機をもっており、このモルガンの目論見を阻止し、杯をマルク王の宮廷に差し向けるラモラの行為もまたマルクとコルヌアイユの国に対する侮蔑とトリスタンに対する復讐の中にはっきり動機づけられている。また、杯の試練の実際の執行者となるマルク王も、トリスタンとイズーの裏切りに対する怨念を動機として持つ。このように、「貞潔の試練」は、「散文トリスタン」において、登場人物間の軋轢と対立の中にしっかりと根づけられている。

とりわけ、ラモラの狙いは、次の引用に見られるとおり、彼が使者に託したマルク宛ての口上にはっきり表されている。

(...) et quant tu i seras venuz, tu t'en iras droit en l'ostel le roi Marc, et li diras que li chevaliers qui point ne l'aime li envoie cest cor por esprover la bonté des dames de Cornoaille, car la bonté des chevaliers fu ja bien esprovee sor la marine devant les paveillons, la ou Tristanz, li biaux mauvés, refusa la bataille del chevalier estrange. Et bien sache Tristanz que por haine et por male volenté de li est cil cors envoiez en Cornoaille. (§527, 34-40)

ラモラ登場に始まるこのエピソードは、杯の使者とラモラとの遭遇を境にして前半と後半の二つの部分に分けることが可能であるが、引用のラモラの言葉にはこの二つの部分のそれぞれの性格を簡潔に要約する表現が用いられており、そこに作者がこのエピソードに当てた意図を読むことができる。つまり、このエピソードの機能は、ラモラの手で前半部においてコルヌアイユの騎士たちの「bonté」を証明し、これからの後半部ではラモラが送りつける杯によってコルヌアイユの奥方たちの「bonté」を試すことで、合わせてマルク王とその宮廷全体をネガティブな姿に印象づけることにあるのだ。

作者はこの意図に合わせて、「貞潔の試練」の古型が有していたいくつかの状況に手直しを加えている。まず、事件の時を見ると、それまでの全ての版に共通であった「聖霊降臨祭」は、「散文トリスタン」では「聖マドレーヌ祭」に置き換えられてしまっている。「聖霊降臨祭」は、アーサー王文学において、冒険を期待させる特別な日であるが、「散文トリスタン」がそれをわざわざ「聖マドレーヌ祭」に変えたということは、既に事件の先行きを暗示するものである。その前のラモラ登場の時にも、「聖ジャン祭」の日が用いられているのが目を引く。「聖ジャン祭」、「聖マドレーヌ祭」はそれぞれ6月24日、7月22日で、時間の流れそれ自体に不自然はない。しかし、このエピソードの前後には、これに類した具体的な日付も、また何らかの季節を匂わすような記述も見出されない。従って「聖ジャン祭」、「聖マドレーヌ祭」の日付の使用は極めて恣意的なものと思われるべきである。コルヌアイユの奥方たちの「bonté」に関わる後半部のために充てられた聖マドレーヌの祭が、マグダラのマリアの罪深い過去を匂わせていることは、ことさら指摘するまでもないだろう⁸⁾。一方、コルヌアイユの騎士たちの「bonté」に関わる前半部に充てられた聖ジャン祭に聖ヨハネを思い起こすのでは意味をなさない。そこには、古来より「ジャン」という名前に込められている「愚か者」、「意気地無し」さらに「寝取られ男」という卑しめられた意味を読み取ってこそ、上述した前半と後半のバランスが生きてくるものと思われる。

また、試練の道具と被験者の組み合わせにも微妙な手直しが確認される。もともと杯を用いた話において被験者は男であり、「マントのレー」では女である。「散文ト

リスタン』は道具としては杯を選んではいるが、被験者としては「マントのレー」の形を取っている。「散文トリスタン」は、こうすることによって、女性の不貞を試すのに男が試練を受けるという不自然な、といって語弊があるなら、間接的な方法を退けたものと考えよう。

「貞潔の試練」の古型において試練は個々の被験者に対して次々と繰り返され、その模様は大なり小なり具体的に描写されるが、「散文トリスタン」では、イズーが試練に失敗したあと、ほかの女たちは言わば付け足しに過ぎず、名前も顔も与えられていない。

Que vos diroie je? Totes celes qui leanz estoient, qui bien estoient cent ou plus, s'essaierent totes au cor, mes il n'en i ot que quatre qui boire i poissent sanz espandre le vin sor eles. (§531, 6-9)

カラドックとその妻（「マントのレー」では恋人）の唯一の成功がアーサー王の宮廷の失墜した名誉を贖うという解決は、ここには見られない。「散文トリスタン」は「貞潔の試練」の古型より3人多い4人の女性に試練に成功させているが、それは上の引用に見られるとおり「4人しかいなかった」ということにほかならず、逆にマルク王の宮廷の腐敗ぶりを象徴するものでしかない。

さらに、「杯のレー」と「マントのレー」を特徴づけるファブリオー的な笑いの性格は「散文トリスタン」では完全に姿を消している点を強調しておきたい。確かに、魔法の杯の使用自体、マルクの宮廷を嘲弄するものであり、またエピソードの結末は、以下に見るように、試練の執行者であるマルク自身に滑稽劇を演じさせることになる。そればかりでなく、上で確認したことに（また「貞潔の試練」のモチーフの導入それ自体に）作者自身の遊びも窺われなければならない。しかし、こうした遊びや笑いの要素は、「貞潔の試練」の古型に認められるがごとく読者に直接笑いを誘う性質のものではなく、登場人物とそれを取り巻く状況の性格づけに関わるものであることをことわっておかねばならない。

マルクの戯画化

さて、このような意図と動機で用いられる魔法の杯が現実にとどのような効力を発揮することになるか、次に見てゆこう。それは端的に言って、マルクとイズーの折れ合うことのない対決を舞台にのせるとともに、この舞台の上でマルクに滑稽劇を演じさせることになる⁹⁾。もとよりこれは、先に引用したラモラの言葉と、その背後の作者の意図の中で予期されていたことではある。

杯のこの魔法の力をこれまで登場人物の誰も信じて疑わない。それは試練に関わる者を震撼させるに充分である。その現れを既にトリスタンに見たが、不安を隠せない

のはイズーも同様である。

Et ele en devient tote esbahie et tote dolente, car ele set bien qu'ele s'est mesfaite envers le roi mout de foiz por l'amor de Tristan. Mout est a malaise et mout pense qu'ele porra faire (...). (§ 529, 14-7)

とりわけ、トリスタンとイズーの場合、その不安は各々がマルク王に対する裏切りをはっきりと自覚しているからにはかならない。

杯を前にしたイズーは魔法そのものの邪悪さを挙げてマルクに対抗するが、

(...)par aventure il est faiz par enchantement por correcier les hautes dames qui n'ont mie fait a la volenté de toz enchanteors ne de totes les enchanteresses de la Grant Bretaigne. Et certes, je sai bien que ceste chose vint de la Grant Breteigne, ou sont tuit li enchantement, et qu'il vos est envoieez por metre descorde entre moi et vos, ou entre autre bone gent de Cornoaille. (§ 530, 14-9)

マルクの執拗さに抗することはできず、杯を口にする。イズーがこの杯の試練に失敗することは言うまでもない。

Et quant ele cuide boevre, li vins espant sor li une grant partie, si que la roïne en est tote moilliee. (§ 530, 21-3)

「散文トリスタン」はこの後、「杯のレー」や「マントのレー」に無かった「裁き」を舞台に乗せる。しかし、これはマルク王が次第に滑稽劇を演じる舞台にはかならない。ここでマルクは、自分の裁きを述べ、陪臣の意見を聞き、そして結論を下す、という宮廷評定の形式を忠実に守る。それだけに一層マルクはこの滑稽劇の主人公として際立っている。

まず、マルクはイズーの正面切っでの抵抗に遣り場を失う。彼は魔法の杯の効果もイズーの不貞の「証拠」として彼女を告発するが、既に魔法を悪と決めつけているイズーは、このような断罪に対し反対にマルクの非道と暴虐を訴えて逆襲する。

Certes, sire, ce dit la roïne, se vos por l'espreve del cor qui est faiz par enchantement me volez destruire, vostre felonie et vostre delealté et vostre creaté i seroit mout apertement coneüe plus que ci n'est ma delealté. (§ 530, 29-32)

またさらに、イズーは自己を弁護するため「決闘裁判」を仄めかす。イズーは口にごそ出さないが、この「決闘裁判」で彼女が代理人(champion)として頭においているのがトリスタンであることは言うまでもない。しかし、この「決闘裁判」に勝てる代理人を自分の館に見出せないマルクは次のように皮肉で受け答えるしかない。

Dame, fait il, vos avez par devers vos tel champion qu'il n'a chevalier
en tote Cornoaille qui encontre li osast bataille emprenre.
(§ 530, 35-6)

さらにマルクは、自分の臣下からも突き話される。イズーに逆襲されたマルクは矛先を失って他の女たちに目を向け、不貞を暴かれた全ての女たちを告発し、重臣たちの判断を要求するが、「各々の妻を自分自身のごとく愛しており、妻たちの破滅を何があっても望まないコルヌアイユの重臣たち」が王に賛成するするはずがない。彼らは、王が自分の后をいかように扱おうと、その自由は認めるが、「かくのごときつまらない理由(si povre achoison)」で矛先を自分たちの妻の問題に向けることの根拠を否認する。

« Sire, sire, vos feroiz destruire ce que vos voudroiz, mes que que vos
facez de la roïne qui est vostre, nos retendrons nos moilliers. Diex nos
deffende que nos ne les faciens destruire por si povre achoison com
ceste nos semble! » (§ 531, 14-7)

ところが、行き場を失ったマルクの怒りは逆にこのコルヌアイユの騎士たちのお人良し振りに救われた結果となる。というのも、マルクがこれまで言ってきたことは、「后を懲らしめるため」でしかなく、彼自身もまた「彼女の死を欲しはしなかった」ことを、最後に作者は明らかにするのである¹⁰⁾。それでもマルクは、王の対面を保つため、重臣たちの「裁き」を聞き入れる風を装うことを忘れない。

(...) et quant vos tenez ceste chose a fable, et je a fable la tendrai,
(...). (§ 531, 24-5)

イズー像の解体

「貞潔の試練」の導入は、マルク王の戯画化だけでなく、イズーに関しても思いがけない一面を垣間見せている。「序」で仄めかせた意外性も特にこのことに収斂する。それは、容赦無く晒しものになったイズーと強硬な対決の姿勢を示すイズーの姿であ

る。これはトリスタンとイズーの物語の伝統には見受けられないイズー像であり、最後にここで問題とするに値しよう。

まず、エピソードの冒頭、イズーがラモラとドリアンの礼を欠いた視線に晒され、とりわけラモラには彼女の美貌を否定されていた事実を想起したい。ラモラの場合これは恋で盲目になった若者の振る舞いではあっても、イズーが他者の眼指しのもとで弄ばれ、蔑ろにされている事実には変わりはない。我々のエピソードそのものが、イズーを一つの客体と見做すことで始まっているのである。

イズーが魔法の杯の力に晒される時、事態はラモラやドリアンの視線の比ではない。彼女は、ワインを浴びてずぶ濡れになった姿を衆目の面前に晒し、しかもこれでもって自らの不貞の「事実」を明らかにしたのである。

このように容赦無く晒しものになったイズーは、ベルールやトマにおけるイズーのように神や語り手自身によって守られてはいない。彼女は、自らを助くものとしては、自分自身（トリスタンを除いては）しか持たない。ラモラの非礼に対して彼女は、それをそのまま許してはいない。他方、マルクとの対決ではしたたかとも言える強硬な姿勢を示している。特にこの場におけるイズーの言葉には、マルクに対するあくなき抵抗の姿勢はあっても、自分の貞潔の問題に関する抗弁は見られないことに注意を促したい。イズーは、彼女に続いて杯の試練に失敗した女性を見て、マルクに次のような言葉を投げつける。

(...) se a morir vient par l'espreve de cest cor, je n'i morrai mie sole.
(§ 531, 3-4)

この言葉には、イズーが、魔法の杯によって暴かれた「不貞」を否定するどころか、半ば肯定して開き直っている感がしないだろうか。

このイズーの態度は、「貞潔の試練」の他の版におけるアーサー王の后グニエーヴルの振る舞いと対照をなしている。「杯のレー」では、グニエーヴルは、杯の試練に失敗して激怒した王に、ゴーヴァンの窮地を救ってくれた若者を宮廷に引き留めるため彼に指輪を贈ったことがある、と弁解する¹¹⁾。また、「カラドックの書」のグニエーヴルは、彼女の反対を無視してアーサーが杯を試そうとするのを見て、「彼がずぶ濡れになりますように」と神に願をかける。勿論アーサーは試練に見事失敗するが、それは神がグニエーヴルの願いを聞き届けたからにはほかならない¹²⁾。グニエーヴルのこうした弁解やトリックは奇妙に、ベルールとトマにおけるイズーのトリック、すなわち、彼女を抱いて瀬渡りを助けてくれた巡礼（＝トリスタン）とマルク王の二人以外に自分の体に触れた者はいない、と神に誓うイズー — トマの「灼鉄の裁き」では、イズーはこの後真ッ赤に焼けた鉄を握って誓いの言葉に偽りの無いことを証明する — を思い出させる¹³⁾。こうした言い抜けやトリック、そして神の庇護は「散文

トリスタン』のイズーには無縁のものである。

「貞潔の試練」の伝統に「散文トリスタン」が加えたさり気ない変更のことをここで再び思い出したい。杯の被験者を男から女に変えた事実は、マルク王の戯画化の効果をその分失い、逆にイズーの晒し者の姿を強調する結果となっている。また、聖霊降誕祭がマドレーヌ祭に取って変わられている事実を思い起こすと、イズー自身がマグダラのマリアに重ね合わさってくるのである。こうした事実を直線的に結んでイズー像を組み立ててみると、我々はその仮面を剥がれた罪深い女を見なければならぬようだ。

「散文トリスタン」に導入された「貞潔の試練」の特質を以上に述べてきたことから要約すると、次のようになる。このモチーフの古形を性格づけていた伝統的素材、とりわけ遊びや笑いの要素は、「散文トリスタン」では殆ど全てが打ち捨てられ、女性の貞潔を試しそれを愚弄する魔術的力の効果のみがかりうじて受け入れられている。魔法の杯をモルガン、ラモラそしてマルクが復讐の武器として利用としたことから、またイズーの言葉から、我々はこの力を悪と規定できる。この悪の力は、作者がマルクに課した性格に通底するものと言ってよい。

その一方で、魔法の力で女性の不貞を計るという現実離れたシチュエーションは一種の愚かしさを孕んでいることはどうしても否めない。我々には、作者が魔法の杯の災いの力とこの愚かしさの上で遊んでいるとさえも思える。魔法の杯の目的はイズーの仮面を剥ぐことにあるものの、その効果はマルクを戯画化することにあるのもこうした点と相呼応している。また、イズーに対する作者の扱いには中世独特のミゾジニーが顔を出しているとも考えることも可能である。

しかしながら、このイズーの姿は我々の大きな関心として残る。というのも、この拙論の範囲では触れえなかったが、このエピソードにおいて我々が垣間見たイズーのネガティブな姿は、「散文トリスタン」においてトリスタンとイズーの不義の愛が、また一般に情念というものがどのように捉えられているかの問いを喚起するからである。

	<i>Cor</i>	<i>Caradoc</i>	<i>Mantel</i>	<i>Tristan</i>
時	Pentecôte	Pentecôte	Pentecôte	Madelaine
舞台	cour d'Arthur	cour d'Arthur	cour d'Arthur	cour de Marc
道具	杯	杯	マント	杯
送り主	roi de Moraine	?	une «pucele»	Morgain ⇒ Arthur Lamorat ⇒ Marc
被験者 (失敗)	(男) Arthur Roi de Sina- doune Roi Nuz Roi de Cornou- aille Roi Gohors Roi Glovien etc.	(男) Arthur Keu Gauvain Yvain	(女) Guenièvre amie de Tor Androëte (amie de Keu) Venelas (amie de Gauvain) amie de Yvain amie de Perce- val etc.	(女) Yseut その他大勢 (cent ou plus)
成功者	Garaduc	Roi de Caradoc	amie de Kara- dos Briebraz	「4人」

Cor = 「杯のレー」 / *Caradoc* = 「カラドックの書」 /
Mantel = 「マントのレー」 / *Tristan* = 「散文トリスタン」

注

- 1) Ed. R.L.CURTIS, *Le Roman de Tristran en Prose*, Tome II, E.J.Brill, Leiden, 1976, § 520- § 531 (特に § 526- § 531).
以下このテキストからの引用には、パラグラフと行のみ指示し、校訂者名及びタイトルは省略する。
- 2) Ed. Ph.BENNETT, *Mantel et Cor, deux lais du XII^e siècle*, University of Exeter 1975.
「貞潔の試練」のモチーフのヨーロッパ各国における伝播の状況については以下のものに詳しい。
T.P.CROSS, *Notes on the Chastuty-testing Horn and Mantel in Modern Philology*, t.10, 1913, pp.289-299.
O.WARNATSCH, *Der Mantel, Bruchstück eines Lanzeletromans*, 1883 (Georg Olms Verlag, 1977).
- 3) Ed. W.ROACH, *The Continuations of the Old French « Perceval » of Chretien de Troyes*, Vol. I, Pennsylvania, 1949 (The American Philosophical Society 1952, reprinted 1965), vv.8493-8734.
- 4) Ed. K.A. HAHN, *Lanzelet*, Frankfurt, 1845 (Deutsche Neudrucke, 1965) vv.5796-6228.
- 5) 「聖霊降臨祭」におけるアーサー王の同様の「習慣」は、*Quête del Saint Graal* の冒頭部にも見出される (éd.A.PAUPHILET, CFMA, pp.4-5)
- 6) 使者は、主人の願い事を王が聞き届けてくれるよう嘆願し、王が聞き届けてくれるまでは、願いの内容も主人の名前も明かせないと迫る。中世アーサー王文学において好んで用いられる «don contraignant» のトボスについてはフラビエの次の論文を参照のこと。
Jean FRAPPIER, *Le motif du «don contraignant» dans la littérature du Moyen Age in Travaux de linguistique et de littérature*, 1969, pp.7-46, repris dans J.FRAPPIER, *Amour Courtois et Table Ronde*, Droz, 1973, pp.225-64.
- 7) ドリアンはトリスタンの本意をよく理解しており、ラモラを納得させようとするものの、それに成功しない。

Et Lamoraz si dolenz com il estoit s'en vet a Driant qui ja estoit montez, et li dit: « Alons nos en de ci. Tristanz, li biax mauvés, a refusee la bataille. Honiz soie je se je jamés le tieg a si preudome com je fesoie devant. Je sai bien que tot ce a il fait par coardise. » « Non a, certes, fait Dryanz, enz le lesse por ce qu'il li semble que a

vilenie li devroit estre torné s'il a nos combatoit après ce que nos
avons tant fait d'armes, et il est toz fres et toz reposez. Ce a esté la
soe pensee et sa cortoisie. » (§ 525, 46-52)

- .8) 「ルカ伝」第8章2節参照。そこでは、マグダラのマリアから「7匹の悪魔が出た」とある。
- .9) Ph. BENNETT, *éd.cit.*, *Introduction*, p.xvi: « En effet le seul but de l'auteur est de ridiculiser Marc, qu'il dépeint comme le jaloux caricatural des *chansons de mal mariée*. »
- 10) このように自らを «cocu» と知りながらイズーを愛することを止められないマルクの姿は『散文トリスタン』の他の箇所でも散見される。
- 11) *Ed. cit.* vv.334-356.
- 12) *Ed. cit.* vv.8581-8609.
- 13) Ed. MURET, *Bérout, Le roman de Tristan* (CFMA), vv.3879-4266.
J.BEDIER, *Thomas, Le roman de Tristan* (SATF), t. I, pp.203-11.
ペルールとトマのこの場面は、「散文トリスタン」にその痕跡すら留めていない。
『散文トリスタン』が意図的にこの場面を排除したと見做すことは不可能ではない。